

## 播磨町教育フォーラム開催！

# 家庭・地域から学校に望むこと

8月22日(金)、中央公民館において「家庭・地域から学校に望むこと」というテーマで、第6回播磨町教育フォーラムが開催されました。

### 基調講演

最初に朝日新聞社友の小西孝彦氏の基調講演がありました。

これからの子どもへの教育は学校で半分、地域・家庭で半分か担うことが大切

今、教育が大きく変わろうとしています。それは、教育改革というより、教育の自由化と言つべきでしょう。目の前にいる子どものために、創意工夫し、社会の変化に対応した新しい教育を創らなければなりません。自分の考えを教育に生かすことができる時代が来たということです。

ここで、今日の教育フォーラムにあたり問題提起をしたいと思います。  
1、私たちの子どものころ、登校日数は約240日でした。昨年から学校五日制が完全実施され、現在は、子どもの登校日は、年間約200日。残りは家庭や地域で過ごすことになったのです。ここに、皆さんこれから考える、「家庭と地域の問題」が現



朝日新聞社友 小西 孝彦さん

れてきます。

2、今、日本の企業の多くが海外に工場を持ち、海外で製品を作っています。非常に極端な言い方をすれば、これからは、教員の半数は海外で働くことになりそうです。そのためには、「まず、健康（本来は家庭だが）が必要なこと。日本の安全感覚が海外では通用しないことが多いこと。小・中・高・大学と十数年の英語教育を受けても話せないこと。宗教について考えること。日本にいるときと違って非常に大切なこと」などに対応できる学校教育が必要になってきます。

3、今までの教育の成果は十分であり、日本も豊かになりました。しかし、これからは、今までと同じ教育方法では不十分であり、体験を通して学ぶことを教育の基本とすべきです。

また、「総合的な学習の時間」が創設されましたが、地域や家庭と大いに連携すべきです。これからの子どもへの教育は学校で半分、地域・家庭で半分担うことが大切になってきます。

以上のような観点で、さまざまな分野からのパネラーの皆さまの意見をお聞きできたいと思います。

### パネルディスカッション

続いてパネルディスカッションに入りました。

講師の小西孝彦さんをコーディネーターに、企業関係から西川敏彦さん、ことぶき大学自治会長の春名亨さん、在外(米国)生活経験者の藤本真美さん、在日米国人のスコット・ゲリー・スタナットさんの4人



▲熱い意見が交わされました

がパネラーとして、それぞれの経験から、これからの学校教育がいかにあるべきかを示唆する提言があり、討論が展開されました。

### 西川敏彦さん

「心を育てる」「共に育つ」

企業から今の若い人を見たとき、企業が求める基礎知識は向上していますが、人間的素養がやや希薄に感じます。例えば、「言葉遣いが十分でない」「あいさつが率先して言えない」「整理整頓ができない」「仕事では受け身で積極性がない」など。一方、若い人は、「認めてほしい」「目標を与えてほしい」「教えてほしい」と思っています。私は社内教育で常に、次のことなどを心掛けてきました。

・学歴や偏差値だけでは幸せに生きていけない。もっと大切なものがある。それは、「心を育てる」こと。

### スコット・ゲリー・スタナットさん

親も教師も、子どもの自主性を大切に

米国では州や市によって異なりますが、小学校から単位制で、教育内容を自分で選択できます。得意な教科であれば、2年生でも3年生の学習ができます。飛び級もあります。また、学校の学習以外にも、スポーツやクラブ、ボランティアも重視され、大学進学にも必要です。

長期休業中には、キャンプなど体験活動が多く用意され、子どもが主体的に選択します。自分で選ぶので、遊びと同じように楽しいのです。

学校五日制が実施され少し変わったかもしれませんが、塾通いなどを含め、日本の子どもは忙しすぎます。その反動が、大学生は遊んでばかりであり勉強しません。

日本の子どもは、子どもでない。日本の大学生は、大人じゃない。

親も教師も、子どもの自主性を大切にしたいものです。



スコット・ゲリー・スタナットさん

最後に、コーディネーターより、「これからは「コーチ学を学んでほしい」という言葉があり、パネルディスカッションを終了しました。



西川 敏彦さん

・企業内に閉じていることなく、進んで地域社会活動に参加し、「共に育つ」ことを心掛けること。

・周りの人のことを、常に自分のことのように考える心を持つこと。

知識はあくまで道具。人間としての基礎ができていなければ、何の役にも立たないのではないのでしょうか。

これからの教育を考えると、一人ひとりに目標・目的を与え、その達成感をほめてやるのが大切ではないでしょうか。自ら目標を立て、それに向かって汗を流せる人間を育てたいものです。

また、「誰かがしてくれる」「自分が言う必要はない」ではなく、主体的に行動する人間を育ててほしいと思います。

### 「子どもは親の背を見て育つ」

春名 亨さん

子どものころは、山で木に登ったり木の実を拾ったり、川で魚を取ったり、自然いっぱいの中で大いに遊びました。

当時は、今のように「勉強、勉強」と言われませんでした。私も子どもたちに、あまり「勉強せよ」とは言いませんでした。友だちを作るためにも、社会性を身に付けるためにも、スポーツを勧めました。子どもたちの人生には紆余曲折がありました。が、すべてスポーツが助けてくれたと思っています。

私の父は厳格な人でしたが、苦しい生活の中で私を大学まで行かせてくれました。母はいつも私の枕もとで、夜遅くまで編み物をしたり、学校に持っていくカバンを作ったりしていました。私はそんな両親に感謝しながら頑張ってきました。

「子どもは親の背を見て育つ」といわれますが、私自身も、私の子どもたちもそうであったと思っています。

今は生涯学習社会です。私はことぶき大で学んでいます。今の子どもたちにも、学び続ける意欲があればと思っています。



春名 亨さん

### 藤本真美さん

学び方を学ぶ教育を参考にした



藤本 真美さん  
米国に住んで、最初は大きな戸惑いを感じました。それは土・日が完全に休

み(当時日本ではまだ)で、夏休みが約3カ月、冬休みが約1カ月あることです。また子どもの教育は、親と教師の責任で、親もできることをボランティアで教育に参加しなければなりません。

しかし一番の心配は、「子どもが無事に学校生活を送れるか」でした。でも、子どもの力とはすごいものです。言葉も分からないのに、いろいろなことをすくすく吸収していききました。

小学校では「楽しさ」が一番印象に残っています。子どもも教師も楽しそうでした。学校では、いろいろなことを選択できます。自分で選んだことができるので、楽しいのです。夏休みには、希望をすれば他の学校の子とも一緒に学習できるし、さまざまな長期にわたるキャンプなどの活動にも参加できるのです。

また、教師は非常にほめ方が上手です。ほめて子どもにも自信を持たせます。

最後に、米国では小学校でも普段からレポートを書かせます。自分で題材を選び、計画を立て、資料を集めてタイプやパソコンでまとめます。「学び方を学ぶ教育」は参考にできたらと思います。